

## 大きく変わる学校

### 共学から男女別学に かえつ有明中学校

副校長 石川一郎先生



編集部 よろしくお願いたします。早速ですが、共学校から別学校に切り替わるとかがいました。  
石川 本校は1903年にスタートしました。1952年に「嘉悦女子中学・高等学校」となり、女子教育を行ってきましたが、2006年に千代田区から現在の有明地区に移転した際、新しい時代にふさわしい教育を、ということで共学化、校名も「かえつ有明中学・高等学校」に改称しました。その共学を、来春の新中1から学年進行で順次別学に変更していくことにしています。

編集部 男子校や女子校、別学校が共学になるケースはいくつもありましたが、共学校が別学になる、といったケースは近年では聞きません。6年間男女別になるのですか。

石川 いいえ。別学は中1から高1までです。高2・高3は進路希望別のクラス分けになりますので共学です。別学と言っても、クラス編成を男子クラスと女子クラスに分けて、授業とホームルーム活動は男女別、学校行事やクラブ活動は今までどおり共学です。校舎を分けるとか、フロアを分けるなども行ないません。「共学だけ授業は別学」です。

編集部 どうしてそのようなしくみをお考えになったのでしょうか。

石川 純粋に教務的な発想からです。本校は共学化のときに従来の女子校の学力・進路の延長・発展としての総合進学コースと、全く別の考え方による新設の難関大学進学コースの2コース制としました。当初はカリキュラムも授業進度も両コースで異なっていたのですが、総合進学コースの入学生の学力水準が年々向上してきました。それとともにカリキュラム等も修正してきて、現在ではカリキュラム・進度は同一で定期テストの問題の一部が違うだけになっています。

編集部 2つのコースに分けている意味が薄くなってきたわけですね。

石川 一方で別の課題も出てきました。総合進学コースに入学した生徒でも、がんばって希望すれば進級のときに難関大学進学コースに移れるのですが、がんばる生徒がいる反面、潜在力があるのに総合進学コースでのんびり行こう、別にこのままでいいよ、という生徒も出ています。生徒の持っている可能性を開拓しきれていないのですね。

編集部 モチベーションですか。

石川 教員の視点で見れば「目標の持たせ方」になるのでしょうか。生徒ひとり一人の達成感に合わせた目標の持たせ方、学習への取り組みせ方で、もっと工夫することがあるのではないかと、もっと力を伸ばせるのではないかと、こうしたことについて教員間で議論を積み重ねました。

編集部 別学の方が良い、という意見が出たのでしょうか。

石川 実は別学は初めてではないのです。女子校から共学化した1期生は、男女別のクラス編成にしていた学年があって、改めて確認してみると別学の時期に男女ともかなり学力が伸びているわけです。男子クラスには男子向けの、女子クラスには女子向けの授業や指導が行なわれていて、それが成果になっていたわけです。

編集部 男子向けと女子向けの違いはどのようなところにあるのでしょうか。

石川 例えば男子は、ゲーム感覚でステージをクリアしていくような授業だと食いついてきますよね。少しヒントを出して、「さあやってみよう！」で互いに競い合って挑戦します。でも女子は細かく指示を出して、1つずつ確認させながら進んだ方が良い結果につながります。学習を進める上で、「これでいいのかな？」と不安になるとき、「それでいいんだよ」と安心させることが大切です。同じ教科の同じ単元を指導するにも、このような配慮をすれば生徒たちの理解度はより上がることになります。

編集部 男女の成長過程の違いも理由ですか。

石川 中学生段階だと女子の成長が早く、男子は幼いです。これは成長過程の違いですが、そのため、どうしても男子は手がかかります。教員の目が手のかかる男子に集中しすぎていたのかもしれない、という問題提起がありました。

編集部 女子はコツコツ勉強するタイプが多く、先生方の手を煩わせるケースは少ないと思いますが。

石川 はい。女子も学力は伸びてきました。でも、ひょっとしたらまだ伸ばしきれていない点があるのではないか、もっと目を向ければさらに伸ばせるのではないか、女子校から共学化して6年しか経っていない本校だからこそ、女子校時代の経験が長い教員は感じていたのです。

編集部 先ほどの「潜在力があるのに総合進学コースで」という生徒のお話ですね。

石川 女子だけでなく男子も、ですが、伸ばせるのに伸ばしていないのはもったいないことです。男女それぞれの特性にあった授業展開、指導で、今までよりもっと伸ばせるのでは、と考えました。

編集部 そのような指導を行なうには共学では難しい、ということですね。

石川 単に成績を上げるだけならお尻を叩けばよいのです。アメとムチで指導する方法もあるでしょう。でもそんな勉強は一過性です。目的意識を持って学ぶ、学ぶ喜びを持つ、こうした姿勢を身につけるには、生徒たち自身が、自ら伸びようとするにふさわしい学習環境を整えることが必要です。そのため、別学で授業を行うことにしました。

編集部 よく男子は理系教科が得意で、女子は文系教科が得意という声を聞きますが、男子は文系教科の、女子は理系教科の授業時間数を増やすなどの違いを作るのでしょうか。

石川 いいえ。時間数、主要教材、カリキュラム、定期テストの範囲などは同じです。ただ、毎日の課題や小テストなどは違いが出るでしょう。男女でクラスを分けるだけでなく、主要教科は男女それぞれで習熟度別指導を行なって、定着しないのに進む、といったことがないように十分対応します。

編集部 高2・高3は共学ですが。

石川 高2・高3は男女関係なく進路希望別にクラスを編成します。この段階では進路目標もある程度は固まっていますし、成長過程の違いも小さくなっ

ています。学習の取り組み方に違いはありますが、むしろその違いをお互いへの刺激にしたいと思っています。男子は直前でスパートするタイプが多いのですが、女子も見習ってほしいですし、女子の細かい点を押さえながらの着実な学習は男子が見習ってほしい、大学受験にはどちらも必要ですから。

編集部 学習面での共学の良さですね。男女別のホームルーム活動についてはいかがですか。

石川 ホームルーム活動でも成長の早い女子がリードして、若い男子がそれに従う、という構図があります。男子は自立が阻害されがちですし、女子は足を引っ張られることもあります。それでも、ホームルーム活動で動こうとする女子と、文句を言って動かない男子とでわいわいやっているのなら、お互いを知る上で意味がありますが、問題はこうしたやりとりの中に入ろうとしない生徒です。

編集部 「我関せず」の生徒たちですか。

石川 こうした生徒にも、もっとホームルーム活動に参加させたい、いろいろ経験を積ませたいのです。失敗することもあるかもしれない、でもそれが成長のステップです。男女別のホームルーム活動で、「消極的でその他大勢になりがち」な生徒に、もっと光をあてることができると考えています。

編集部 学校行事とクラブ活動は男女一緒ですね。

石川 やはり男女がお互いを知り合い、偏見を持たず、協力しあって1つのことを成し遂げることはとても大切です。それを経験できるのが共学の良さです。ですから学校行事とクラブ活動は今までどおり一緒に活動します。

編集部 学習以外の面では、別学と共学の両方の良さを、場面を分けてそれぞれ実行しよう、ということですね。

石川 今回の別学移行は「男らしさ、女らしさの教育」といった発想ではなく、純粋に教務面での「より伸ばしたい」がスタートで、「ひとり一人の成長のプロデュースのための男女別クラス編成」に広がった取り組みです。ですから、共学の良さを守りつつ、男子校・女子校のメリットを大きく取り入れたものです。別学校は例が少ないため、イメージが沸きにくいかもしれませんが、学校選びの1つの方向性として、受験生・保護者の皆さんに検討していただきたいと思っています。

編集部 ありがとうございます。